

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	敬語の一要因としての日本の社会構造と日本人の心理
Author(s)	マイケル ホール,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1995 : 181 - 188
Issue Date	1996-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039376
Right	
Relation	



敬語の一要因としての 日本の社会構造と日本人の心理

マイケル・ホール

初めに

敬語は簡単にいえば、相手に対する尊敬を込めたの言いまわしである。聞き手や話題となっている人を敬うことを示すために使い、三つの方法が存在している。その三つとは丁寧語・尊敬語・謙譲語である。丁寧語は相手に対するやらかい言葉の言いまわしである。尊敬語は相手のものや行為に対する尊敬を表したものである。謙譲語は自分のことを、相手に対してへりくだって伝える言葉の言いまわしである。

研究として、敬語は広いテーマであり、多くの研究者が取り上げている。三世紀の日本人は、すでに言葉使いが階級的にわかれていたと思われているが、敬語の由来は階級社会の出現と関連がある。この意見は私の研究の基盤で、実に細密な規則と慣例とによって支配されている敬意の行動を日本人がどうして表すのかに興味を抱いている。

日本社会を包括的に研究した初期の外国人研究者にルース・ベネディクトという人がいる。彼女は有名な著書『菊と刀』に「人と挨拶をし、人と接触する時には必ず、お互いの間の社会的間隔の性質と度合とを指示せねばならない。」と書いている。私の研究目的は、敬語が役割を果たす日本生活の中の階級・階層制度と風習の原理を理解することにより、ベネディクトの述べるような概念を理解することである。そのために、日本社会の構造と日本人の心理を分析するつもりである。

ベネディクトは「性別と世代の区別と長子相続権とに立脚した階層制度が家庭生活の根幹になっている。」とも言っている。また、私の目的はその階層制度の原理を理解することで、敬語の使い方を説明するわけではない。なぜならば、敬語は階層制度の一つの結果であり、社会構造や日本人の心理を示すのに必要なものだからである。

日本の社会構造

まず、日本人の社交性を理解するために、社会構造を分析することが必要である。これから、日本社会の特徴を述べていくが、そのために、「タテ」と「ヨコ」という概念を分析するつもりである。「タテ」と「ヨコ」は中根千枝の著書『タテ社会の人間関係』に初めてはっきり提唱された概念である。

初めに、「タテ」と「ヨコ」のそれぞれの社会の作られ方を理解するために、様々な用語を定義しなければならない。まず必要な言葉は「場」と「枠」の二つである。これは中根千枝の言葉である。中根千枝は「資格(枠)と呼ぶものは普通使われている意味より、ずっと広く、社会的個人の一定の属性を表すものである」と書いている。これに対して、「場」は一定の地域とか所属機関などのように、個人が集団を構成していることを表す。

「場」と「枠」とを比べると、日本では「場」の方が社会的に集団構成とその認識において大きい役割を果たしている。「場」によって構成された集団は、閉ざされた世界を形成し、人々がエモーショナルで、絶対的な参加をすることにより、その集団に一体感が起こって、強い機能を持つようになる。そのために、個々人を結ぶ組織は特徴的なものである必要はないが、それぞれ類似した規則を必要とする。そして、日本におけるこの規則は「タテ」の組織と呼ばれている。クリストファーも“The Japanese Mind ”という本に“The most important aspect of social status in Japan : it is acquired not by individual achievement , but by group affiliation.”と書いている。これは「場」に直接関係している。すなわち、日本で、重要なことは「枠」つまり個々人の能力よりも、むしろ「場」つまりどの集団に属しているかということである。

日本人が家の外へ出て行き、位置づけられる場合には、「枠」より「場」が優先するのである。このことから、「リーダーはつねに一人に限られる」という日本独特の概念が理解できる。それから、日本の生活の基準について、社会的に階級が必要であろう。この階級の生活により、「タテ」の関係は機能をもつ。それが、集団構成員の結合の構造概念になると、たとえ集団の中で同じ「枠」をもっている人であっても、「タテ」という意識がもつて差別される。

このような社会の「タテ」の関係には、先輩と後輩という概念も含まれる。先輩に話す時は、敬語を使うが、後輩には使わない。このことは敬語と「タテ」のはっきりとした関係を表している。初めて他人と会う時は、どの程度の敬意を示すべきかを知るために、名刺が交換される。これで相手の階級内の立場を早く理解できるようになる。このことから自分の相対的な立場を表示されるのは普通のことであると結論できる。

上記の概念から日本人の社会的な要求へと考えを進めることができる。日本人の価値観は経済的な目的よりも、むしろ社会的な目的に方向づけられるだろう。例えば、会社の経営が最終的に成功するためには、社会の「和」ということを優先する場合もある。そのような「和」を基本とする概念は天皇制を通して、今日でも、中央の政府に見られている。中根の著書には「日本における政治権力というものは、つねに日本独特の社会構造に支えられて、威力を発揮してきたのである。さらにこれは、のちに述べる日本人にみられる宗教・哲学の貧困と相まって、いっそう政治優先の社会を形成しているである。」と書かれている。

天皇制の影響のことは後でもっと詳しく述べるが、本質的に「タテ」の構成に依存す

る理論である。つまり、輝かしいリーダーは、個々人の力をあてにし、集団の個々人はリーダーの権力をあてにできる。すなわち、これは相互依存の関係である。

これが「タテ」の集団構成の基本なのかどうか疑問を抱いた人のために、第二次大戦中の例を考えてみたい。戦時中には多くの人が軍の階級による様々な困難を経験したそうである。例えば、一流指揮官が傷を負って指令が出せなくても、他の将校が速やかに彼に代わるということはできなかつた。このような場合に「タテ」の構造の影響による管理主義が引き起こす困難が見られる。それは庶民から天皇に至るまで、まことに明確に規定された形で施行された封建時代の日本の階層制度が、近代日本の中にも深い形跡を残していることを表していると言える。日本独特の「人の『和』」という概念に戻ると、集団の中に優れた能力を持っている人がいても、「タテ」構造の影響でリーダーに昇進できない場合もある。つまり、簡単にいえば、リーダーは能力ではなく、年齢と会社に入った年によって決まるのである。日本人は、先輩と後輩による「タテ」の集団構造に属することによって個々人を確認できる。つまり、集団の中の地位を捨てると、自我を確立できなくなってしまうのである。集団の中の地位は日本人にとって大切な「親分」と「子分」の関係を作らせることができる。本質的に、伝統的な「親分」・「子分」の関係というのは「母と子」・「家主と借家人」などのような依存する関係である。つまり、「タテ」構造は毎日の生活に浸透しているのである。これはベネディクトの「すべてのものをあるべき場所に置く」という日本人のモットー（の理論）を示している。「タテ」の構造をした集団内の相互関係の程度は、日本人の人間関係に対する敏感さや表現や表情などに関係が深いだろう。敬語の中には、時々曖昧で、好都合なものもある。摩擦を避けるために、相手に諂う敬語もある。

以上のように、日本社会の「タテ」の集団構成は人々の相互関係において個々人の地位を確認する手段を有しており、そのための基準を定めている。この手段の中の一つが敬語である。

階層制度を認めるという行動は、呼吸することと同じぐらい日本人にとって自然なことであると思われる。

日本人の心理

ここからは社会構造から心理に言及していく。クリストファーは著書において、ある国民の特徴はその国語が理解できることによつてのみ学べるというようなことを書いている。

日本人の心理も学者によってよく取り上げられている。特に、土居健郎のような精神医学者たちは約三十年前から日本人の心理について強い関心を持っており、土居の有名な著書『甘えの構造』のような研究も多くなってきている。私の研究の目的にとっては、そ

(4)

これらの研究をできるだけ簡潔に整理することが必要なので、重要な概念だけ選んでいく。その重要な概念とは土居健郎が提唱した「甘え」と「表と裏」という概念である。本質的に「甘え」という意味は本来乳幼児の母親に対する感情と受身的愛情希求であり、人間にとって親子の関係を離れ、客観的な現実の世界の生活、つまり社会生活に入ることに不本意をなものである。いいかえれば、「甘え」は第一義的に欲求的な性質を持ち、その底面に本能的なものが存在する感情である。「甘え」は日本人の心理にのみ見られると考えられているが、外国の社会にもないわけではない。しかし、「甘え」という言葉が日本語独特であるために、日本社会で発達し、はっきりと表されているのだろう。同時に、上記の「表と裏」という概念も日本人の心理について指摘されている。「表」と「裏」とは「甘え」の主要な概念である。

「甘え」が親子の間に存在するのは当然のことであるが、その他の関係で互いに「甘え」が動く場合は、すべて親子関係に準ずる場合か、親子関係の要素を持つ場合と考えられるのである。

このような限定は「甘え」と社会構造の関係を表している。すなわち、「甘え」が「タテ」社会の一つの原因なのである。これらのことを認識するために、土居健郎の天皇の例をあげる。「天皇は、諸事万般、もちろん国政に至るまで、周囲の者が責任を以て万遺漏なきよう取りしきることを期待できる身分である。」と書いている。従って、天皇は周囲に対して絶対的に存在し、同時に周囲の人々も天皇に従属している。土居は「天皇に限らず日本の社会ですべて上に立つ者は、周囲からいわば盛り立てられなければならないという事実が存するが、これも同じような原則を暗示するものである。いいかえれば、幼児的依存を純粹に体现できる者こそ日本の社会で上に立つ資格があることになる」とも言っている。以上のように、日本社会は天皇制度に準ずるので、日本人の心理を表すことによって「タテ」社会の構造が正確に示されていると思う。

依存することも一体感も「甘え」に属する。日本の集団というものは、人間が何かに所属するという経験を持たない限り人間として存在することができないという前提を確かものにする。このことから、「甘え」は相手との一体感を求めることであることが分かる。

「甘え」の基礎が親子の関係だと考えると、どうして成人でさえも子供の心理を持つのかと考えるだろう。つまり、「甘え」の感情は大人になるまでも持ち続けられるので、周囲の人々や現実に対する態度が「甘え」構造を通して作られるようになる。このようなことが起きるのは「裏」と「表」が「甘え」の主要な概念であるからだとは私は思っている。

「裏」と「表」には、「本音・建て前・内・外」などが属している。簡単にいえば、「表」は現れて、見ることができ、日本人はよく「表は顔」と言われている。「裏」は目に見えず、隠されていることだと考えられている。「内」と「外」ということは説明が必要ではないように思う。しかし、「本音」と「建て前」とは説明が必要かもしれない。

「建て前」とは人々の合意によって作られる。それは、いつもその背後に合意する集

団が存在することを暗示している。これに対して、「本音」というのは集団に属する個人が、「建て前」に合意はするものの、それとは別に、「建て前」の背後で持っている思惑のことである。それに「建て前」は「表」に現れているが、「本音」は「裏」に隠れている。日本社会は「表」と「裏」に基づく。従って、「本音」も「建て前」も含まれている。言い換えれば、日本人が人格的に完成されるということは、「表」と「裏」がうまく使い分けられるかどうかにかかっている。それから、日本人は生涯を通じて「表」と「裏」との矛盾を最小限に抑圧し、「外」の人に「裏」を表さないようにする。要するに、日本人の人間関係は相手に対してどれくらい「甘え」うるのかによって決定される。「甘え」のレベルが高いほど「内」または「裏」が表出され、「本音」を表すこととなる。

日本社会において「甘える」ために「表」と「裏」が起こる例は日本人の意見の相違の場合である。意見の相違が存在しても、「表」に現さないのは、外国人にとっては不思議である。相違はなんとなく表されないようにし、衝突が隠されるほどまでになっているわけである。私は、相違を覆い隠し、衝突を避けるために、敬語でいつも相手を敬う気持ちを示していると思っている。

「甘え」は親子関係に基づく小さい子供の心理だと考えられている。同時に、日本では子供と老人が最も自由と気まますを許されると思われている。私の考えも同様である。目上に敬語を使う場合には、子供の機嫌をとると同じように、もっぱら目上の機嫌をとることが目的だろうと考える。敬語を使わないと、目上の機嫌を損ね、その結果、自分に不利を招いてしまう。土居も「子供に対するのと同じように目上の機嫌をとらなければならないという事実自体は、日本人において子供心が成人に達した後も持続することを物語っているのである」とも言っている。本質的に「甘え」の存在はこのようなことを許している。

日本人はよく集団主義的であると言われている。集団としては強いが、個人としては弱いとも言われる。また個人の自由が確立されないととも言われる。そのことは全体的な傾向として、事実だろう。このようなことは、日本人に「甘え」が顕著に見られることとよく一致する。このことは日本社会に「表」と「裏」を通して、「甘え」を顕著に表示することであろう。よって、この概念は日本人の心理を理解するために、鍵となる概念だと思っている。この鍵となる概念のため、日本社会は階級制度を確立しているばかりではなく、階級制度を通して敬意を表す行動という結果を生む。

私は上に述べたように、日本人の心理と「タテ」社会という概念を通して階層による社会が起こっていると考える。もちろん、この二つの概念ばかりが影響力のある概念というわけではないが、一番重要な原理だと思っている。日本人の心理が基礎となって、「タテ」社会が設定されるようになり、階級制度が確立されている。結果の一つは、「タテ」社会に必要なこととして作用し、日本独特の「甘え」・「表」・「裏」という概念と相互に働く言葉と行動による敬意である。

重要なことは、「タテ」の概念はそれだけが独立して存在しているわけでもなく、日本人の心理を理解する唯一の鍵概念というわけでもないということである。日本の社会構造は「甘え」・「表」・「裏」の心理を許容するようにできあがっているのである。「甘え」・「表」・「裏」は、日本人の一人一人の構造を理解するための鍵概念であるばかりでなく、日本の社会構造を理解するための鍵概念ともなりうる。中根千枝は日本独特の社会構造を「タテ」関係で記述することができるとしているが、それはまた日本人の心理を理解するための鍵概念であるとも考えることもできる。土居は「むしろ日本人の甘えに対する偏愛的な感受性が日本の社会において、タテ関係を重視させる原因となっているといってもいいかもしれない」と述べている。私もそう思っている。

それだけではなく、敬語は階層のレベルにより、人々がコミュニケーションする場合に、日本人の心理に従って、相手を敬い、敬意をもって、遠ざけるために使われる。

日本では、敬語が非常に発達したと言われている。敬語は自分より目上の人物を敬って使われる言葉であるが、上にも書いてあるように、目上に対して使う言葉に含まれる気持ちは小さな子供に使う言葉に含まれる気持ちと非常によく似ているのではないかと思う。この類似性は「甘え」・「表」・「裏」などの意識のためであり、敬語使用の必要性は「タテ」構造のためである。

終わりに

日本人の心理と日本の「タテ」社会構造は、上に示したように、日本独特の言葉とそのような概念の基盤として作られる「タテ」社会との直接の関係を表している。「甘え」・「内」・「本音」などのような日本語独特の言葉を理解することを通して、日本人の心理を理解することは他と異なる日本社会に独特な属性を明らかにすることにつながる。日本語独特の表現と日本人の心理には直接な関係があり、「タテ」社会の一つの主要な原理は日本人の心理である。

ルース・ベネディクトはなんとといっても、「それぞれの領域が周到に階層にわかれていて、上の者も、下の者も、自分たちの特権の範囲を越えると必ず罰せられる。」と書いている。これらのことから、「ふさわしい位置」が保障されている限り、日本人は不平を言わずにやっていくことができ、安全だと感じることもなる。ルース・ベネディクトは、「階層制度を正当なものとして受け容れてきてという理由で『安全』である」とも言っている。

このような階層が生まれるのは、「タテ」の構造の影響でもあり、機能を果たすために必要な「甘え」・「表」・「裏」という概念の影響でもある。この階層制度の一つの結果が敬語というわけである。敬語というのは「甘え」・「表」・「裏」という概念と調和

して働き、「タテ」社会に対して、必要な手段としても働いている。「甘える」ために、目上の者を敬う敬語の目的というのは、興味が深く、前にも述べたように、子供に使う言葉に含まれる気持ちと似ている。しかし、仮にこのことが正しいとしても、敬語と日本人の心理とが幼稚だと言うわけではない。そのかわり、敬語は「タテ」社会で生きていくために必要な道具として発達し、従って、この社会で主要な機能を果たしている。

また敬語は一つの研究分野としては広すぎ、範囲を限ろうとするのは不可能である。しかし、「甘え」・「表」・「裏」という日本人の心理独特のテーマと社会構造とを結ぶことは、この二つの概念の直接の関係を明らかにし、敬語の一要因をも示している。

(8)

参考文献

Benedict, Ruth (1983) 『菊と刀』 東京：社会思想社

千枝中根 (1982) 『タテ社会の人間関係』 東京：講談社

Christopher, Robert (1983) "The Japanese Mind : The Goliath explained"
Tokyo: C.E.Tuttle

Doi, Takeo (1988) "The Anatomy of Self" Tokyo: Kodansha International

土居健郎 (1980) 『甘えの構造』 東京：弘文堂

久野 (1977) 「英語圏における敬語」『岩波講座日本語 4 敬語』 東京：岩波書店

南不二男 (1977) 「敬語の機能と敬語行動」『岩波講座日本語 4 敬語』 東京：岩波書店

鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 東京：岩波書店

辻村敏樹 (1977) 「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語 4 敬語』 東京：岩波書店